

本欄がみなさんの目に触れるころには東京オリンピックも終わっているでしょう。この原稿を書いている開催直前のタイミングでは、事前不祥事がぼろぼろとあふれ出し、日本のあらゆる恥と稚拙さと機能不全が世界に広く知られた致命的な大会になるようにしています。開会式への出席を取りやめる海外の要人やスポンサー会社の社長が続出し、それが「賢明な判断」と称えられるすさまじい状況です。

振り返ると2013年9月。「おもてなし」プレゼンで東京が開催地に決まった瞬間が始まりでした。歓喜に湧く代表団の写真も、現在の目で見ると、地獄の蓋が開いた光景に見えます。

幸福の絶頂に見えた瞬間が、実は後から振り返ると地獄の始まりだったということ、珍しいことでもありません。生きていたら今年還暦を迎えていたはずのイギリスのダイアナ妃も、そんな経験をしています。

1981年7月29日、ロイヤルウェディング史上最長の8m近いヴェールをまとい、1万個のマザー・オブ・パールを縫いつけたウェディングドレスを着たダイアナ妃は、世界中から祝福を受け、幸福の絶頂にありました。

しかしその後、ダイアナ妃は夫の愛人問題に悩み摂食障害と闘い、別居、

離婚、自立して次の未来へ動き出した矢先にバリで事故死、という経緯をたどります。生前、地雷撲滅キャンペーンで訪れたサラエボで、地雷を踏んだ犠牲者がつらい事故の記憶を話した時、ダイアナ妃はこう言っています。「私の場合、1981年7月29日だったわ」。

ご成婚の日ですね。  
完璧な幸福と見えたものが実は地雷だった、という例もあればその逆パターンもあります。スウェーデンの次期王位継承者ヴィクトリア皇太子(44)も摂食障害で苦しんだ時期があるのですが、摂食障害により落ちた筋肉

を取り戻すために通ったジムで、皇太子は未来の夫ダニエルと出会うのです。このダニエルがまた素晴らしくて、出会ったときはスポーツトレーナーなので、国王はじめ国民から猛反対を受けました。それでもあきらめず、王室の公務に必要な基礎的教養や外国語など、あらゆる分野を7年かけてマスターし、王室にふさわしい男性と認められてついに国王の許しを得て、国民からも祝福されて結婚します。ダニエルはプリンスの称号を得てヴェステルイェートランド公爵になりました。皇太子の摂食障害という地獄が、

後から見ると幸福のきっかけだったという例でもあります。  
ちなみにヴィクトリア皇太子もダイアナ妃と同様、スタイルアイコンとして世界から熱い視線を浴びるので、自国ブランドH&Mとハイブランドの小物を巧みに合わせるセンスの良さだけで支持されているわけではありません。万難を排して愛を貫く信念、王位継承者として積み重ねたキャリア、そして病とも向き合い、克服して前進する姿を国民と共有する姿勢が、新しい時代のリーダーとして希望にあふれて見えるからこそ、装いも素敵と称えられているのです。



なかのかおり  
1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、昭和女子大学客員教授、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「『イノベーター』で読むアパレル全史」(日本実業出版社)、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」(吉川弘文館)ほか多数。

## 中野香織 「ファッション歳時記」 120

### 今日の絶望、 明日の希望



ヴィクトリア皇太子(左)と夫のダニエル。皇太子が摂食障害で苦しんだ後、ジムに通い始めて二人は出会った

地獄が希望に変わるには天の助けが必要ですが、それを得るには本人の努力も大切と見えます。東京オリンピックも、後から振り返ったときに、悪いところを全部出しきって新しいスタートを切るよい機会だった…と言えるようにしたいですね。